

地震前の街並み 絵画に

東京で個展
15日から

崇城大芸術学部（洋画コース）教授を務めた有田巧さん（66）が3月末で退職し、4月から東京・青梅市に移り住む。15日から銀座の永井画廊で個展を開き、熊本地震前に描いていた熊本市の街並みなど30点を並べる。



ルネサンスの教会壁画
いたとき、研修先のイタ

リアで出会ったのがフレスコ画だった。「洋画の細かいことにこだわって悩んでいましたが、フレスコ画のおおらかさに触れて肩の力が抜けて」。以来、イタリアに留学し画法を学んだ。

「明治時代の創業の様子など、店主から聞いた店や街並みの歴史を今でも覚えています。古い建物や通りには生活の匂いがあって良かった。今では更地になり、人も減って寂しい」

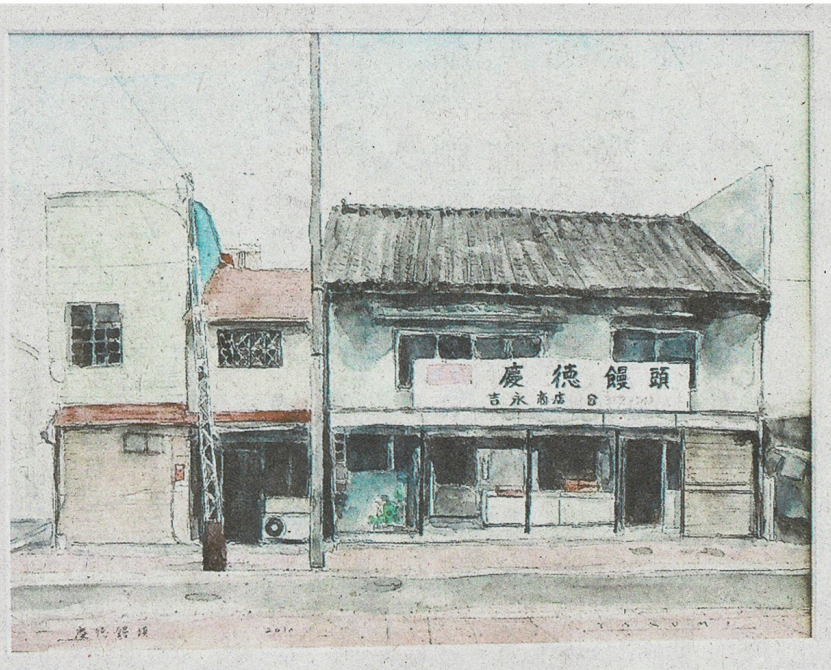
「充実していた」と言う熊本の19年間は、人とのつながりにも支えられていたようだ。東京では自宅を拠点に創作活動を続ける。

崇城大の元研究室には、着任した際に大学がフレスコ画制作のために作ったレンガ壁（幅8メートル、高さ約4メートル）が今も残る。創作の拠点であり、「ここで思う存分描きました。大作も小品も。いい思い出です」。

水彩画を描くようになつたのは08年ごろ。個展に出品するのは熊本市の饅頭屋、表具材店といった古い商家などの作品20点。誰もが知る懐かしい建物だが、その多くは

※「有田巧―熊本を描く―展」は15日～25日。熊日で連載した夏目漱石の小説「二百十日」で、有田さんが描いた挿絵原画10点も出品する。

（藤本英行）



有田巧さんが東京・銀座での個展に並べる水彩画「慶徳饅頭」（2010年、31センチ×41センチ）